

日本撰述の偽疑經典を対象にしながら、經典とは何かについて考えてみたい。まず、日本撰述の偽疑經典として名高いものとして、平安期に製作されたと推測される『蓮華三昧經』が挙げられる。本經は、本覺思想を支える經証として、安然の『教時諍論』などに引用されていることが既に指摘されており、日本で撰述された最初期のものとして夙に有名になった。また、奈良に始まる四箇法要の中で盛んに唱えられた錫杖の功德を讃える「錫杖」も、『錫杖經』として經典の体裁を取って現在に伝わるものの一つである。

次に平安時代のもを挙げてみれば、南都に起きた三学（戒律、禅觀、智慧）の復興運動の中で注目されるようになった『五百大願經』に指を屈することができる。この經典は釈迦信仰の興隆の中で『悲華經』に登場する釈迦如来の「五百の大願」の記述に基づき、『悲華經』の文を援用しながら、五百箇条の願を創作しようと試みて經典の体裁を取ったものである。本經は早くから注目され、幾つもの研究が存在する。また、京都を中心とした仏教界の中にも經典の製作活動は行われたと見え、古代の所産と推定されるが、『大乘授戒經』なる經典が製作されている。これは七寺から発見されたものであるが、大乘の具体的な学処の提示という興味深いテーマの元に製作されている。

さらには江戸時代においても新たな經典が製作されており、たとえば地藏菩薩に延命を託した『延命地藏經』なるものが製作されている。『延命地藏經』は一般に利用されたものであり、様々な流布本すなわち多くのヴァリエーションが存在することが知られている。現在、流布している形態のものが最終的に確定したのは、近世江戸時代と推定されている。また白隠が延命の二句を付加したという『延命十句觀音經』なるものも存在する。この經典は中国においてすでに用いられていたことが知られており、本文が短いが功德を得ること大なるものであるといい、こちらも庶民の間に広まったものである。

日本において撰述された經典が数多く存在することは意外と知られていないが、その製作の目的には三つの方向性があるように推定される。一つには出家者がその新たな教理的展開のための經証に必要と考えられて製作された、二つには在家信者の日常の生活の中で唱えられるよう短く纏めて製作された、三つには民間で信仰される様々な事象に対し、その權威を高めるために製作された、というものである。さらには出家者向け、在家者向けと二大別があったようだ。經典は釈迦の説であると位置づけられ、人々の信仰を支えると同時に、そこに説かれた内容を權威づける機能とがあり、しかも常に社会の要求に応じて新たな製作が可能であった。